

教育システム情報学会論文テンプレート(本行は論文題目行)

第一著者姓 著者名^{*1} 第二著者姓 著者名^{*2} 第三著者姓 著者名^{*3}

Paper Template for Transactions of JSiSE

Givenname SURNAME^{*1}, Givenname SURNAME^{*2} and Givenname SURNAME^{*3}

1. はじめに

この文書ファイルは教育システム情報学会(JSiSE)の学会誌に投稿する研究論文(ショートレター, 実践速報)のためのテンプレートである。論文投稿時には, 本テンプレートを用いて原稿を執筆されたい。

2. 論文の構成におけるタイトルページ

論文の構成は, 種別, 和文表題, 和文著者名, 英文表題, 英文著者名, 本文, (謝辞), (付記), 参考文献, (付録)の順序とする。(括弧)で示す謝辞, 付記, 付録は必要があれば上述の位置に付して良い。

2.1 種別

本テンプレートのタイトルページの冒頭に記載の, ショートレター, 実践速報から適切なものを選択し, 残りは消去する。

2.2 論文の表題

和英両方でテンプレートの順にしたがって書く。副題を付与したい場合は長ダッシュ“—”で前後囲むこと。

2.3 著者名

和英両方でテンプレートの順にしたがって書く。和文の場合, 姓と名の間に全角スペースを挿入すること。英文の場合, 名姓の順で間に半角スペースを挿入し, 姓は全て大文字とすること。著者毎に上付きで記号 * に順番に数字を付して対応させた所属名称を 1 ページ目下部の罫線下のテキストブロックに和英両方で全段に跨って書く。本テンプレートの通り, 同欄には受付日の行があるが, 出版社側で日付補完するため, この行は編集する必要はない

が消さずに残しておくこと。

3. 本文

本文は, 章・節・項等の見出しを付して, 和文で記載する。図・表・箇条書きは本文内の適切な位置に含めて記載すること。

3.1 見出し

本文内には, 章・節・項, 等に見出しをつけて読み易くする。各レベルに応じた見出しの番号付けには表 1 の体裁を用いること。本テンプレートのスタイル自体の書式をそのまま利用されたい。

表 1 見出しのレベル

体裁	レベル
1.	第 1 章
1.1	第 1 章第 1 節
1.1.1	第 1 章第 1 節第 1 項
(1)	細別項目の第 1 段
(a)	細別項目の第 2 段
①	細別項目の第 3 段

見出しは, 意味的まとまりのレベルで付されるものであるため, 抽象度を上げた記述よりも, どちらかといえばその内容を端的に表現した具体的な内容記載が望ましい。

章・節・項の見出しは, 段落設定により, 段落前に 0.5 行, 段落後には 0 行がセットされている。行間は 1 行である。段落のフォントサイズにより幅が異なるため留意されたい。

以下は利用しているフォントとサイズである。

- 章レベルは, “MS P ゴシック” 10 [pt]
- 節・項レベルは, “MS P ゴシック” 8.5 [pt]

^{*1} AA 大学 BB 学部 (Faculty of CC, DD University)

^{*2} EE 株式会社 FF 研究所 (GG Laboratory, HH Inc.)

^{*2} II 大学大学院 (Graduate School of JJ, KK University)

受付日: YYYY 年 MM 月 DD 日

3.2 論述文

- 論述文は，“MS P明朝” 8.5 [pt]

本文部分のレイアウトは、1行 24 字で 44 行の 2 段組みとし、最大 2112 字のページ設定である。テンプレート自体を印刷時の B5 サイズで設定して配布するため、著者の手元では印刷イメージと差異がない状態である。余白は、上下 2.5 [cm]、左右 1.5 [cm]に設定されている。

文体は、「ですます」調ではなく、「・・・である」調で記載し、漢字には「常用漢字」を用いて、学術用語は文部科学省の規程があればそれに従うこと。

論文における論述の一般的な書き方は、書籍等でも幾つか出ているのでそれらを読んでみることをお勧めする。また、学会の執筆要領も参考にして、その評価要素をしっかり認識することも大切である。何より、本学会誌掲載論文を研究の内容に即したレビューのほか、少なくとも複数メタレビューを試みるものが採録への近道となる。

避けた方がよい表現も幾つか挙げておきたい。「～っと私は思ったから」「そんなことをみんながいっぱい言っていた。」など話し言葉の類は避けた方がよい。論文の客観性に鑑みて、「感動した。」「衝撃的だった。」といった著者の感情や「ものすごく」といった主観的な表現も避けた方がよい。「被験者の皆様には、その時にアンケートに回答いただいた。」のような謙譲語や「回答くださった」のような尊敬語、あるいは「事後テストに解答してくれた。」のような平易な表現も避けた方がよい。

インデントは各段落冒頭1文字含めること。段落は複数の文から構成され、意味的まとまりのある単位である。したがって、極力 1 文のみの段落は避けた方がよい。

句読点は全角で「，」「。」を利用すること。半角の「,」「.」を用いた後に半角スペースを使う用法は避けること。強調のための装飾（ボールド:太字体、イタリック:斜体、下線）は読みにくくすることがあるため、なるべく使わない方が望ましい。図・表およびそれらのキャプションと本文との間は 0.5 行程度スペースをとることに留意されたい。一文字だけの行などが生じた際はなるべく調整されたい。



図 1 図の例

3.3 図表

図はそのまま印刷されるので、明瞭なものを用いる。解像度などに注意し、ベクター画像の利用を推奨する。ラスターイメージ・ビットマップ画像等を用いる場合には、ジャギーの有無を拡大等により十分確認の上、鮮明な画像を用いること。Word のオプション・詳細設定の機能において、イメージのサイズと画質から解像度を確認し、220 [ppi] 以上 (300 [ppi]以上が望ましい)となっていることを確認されたい。また、PDF を作成する際に画質が劣化しないようにも注意すること。図の配置位置は中央とし、テキストラッピングは，“Top and Bottom”とする（インラインにしないこと）。

図および表は、論文全体を通じてそれぞれ通し番号をつけ、図のタイトル（キャプション）は下欄に、表のタイトルは上欄に中央配置して和文で表示する。タイトルは，“MS Pゴシック” 8.5 [pt]で、上下 8.5 [pt]余白を設け、段送りは 1 行で設定している。図表とそのタイトルが同一ページになるよう調整すること。また、表がページ間を跨らないように調整すること。Word 以外のソフトウェアで作成した表を画像形式で挿入して本原稿内で表として挿入することは推奨されないが、そのような必要がある場合は、画像の劣化に注意し、フォントサイズが見やすい範囲内（本文テキストサイズ程度）となるよう注意すること。

写真は図として扱う。図は白黒のものを原則とする。全ての図表は、本文内で適切に参照されなければならない。そのため、参照順を考慮の上、可能な限り、本文内で参照している章・節の中あるいはそれに近いところに配置する方が望ましい。

図表の大きさは、刷り上がり(B5 版)で、片段内または全段内とし、段幅からはみ出ることないように調整すること。図表内の文字の見かけ上の下限サイズは刷り上がりで 6 ～ 7 [pt]までを原則とする。これより小さな文字の使用は受け付けられない。図表内の論旨説明上必要な文字の言語は、和英いずれを用いてもよい。

3.5 数式・記号

数式を挿入する際には、行末に式番号を(括弧)付の通し番号を付与し、本文内で全ての数式を参照する。数式中的変数名などは斜体を用い、逆に関数名などは斜体にしない。数字は斜体等の装飾をしない。もし単位を付す場合は、数値と単位(斜体にしない)の間に必ず半角スペースを挿入すること。数式を記載する場合は、それが論述の文内にあることを意識して記載する。

例えば、下記の例では 2 つの式を 1 行目の式の後に「，」で改行後 2 式目を記し、続く本文はその文内での続き

で記載している。ただし、「以下の式を用いる。」のように前文で記載している場合にはこの限りではなく、式に読点「。」を付す必要はない。

$$\begin{aligned} \dots \text{の式をそれぞれ,} & \\ y = f(x) + e, & (1) \\ z = g(x) + e & (2) \end{aligned}$$

とする。式 (1) は、...

この例にあるように式(1)、(2)のように複数次式続ける場合、最後の式の後に「。」はつけない。なお、Word では数式エディタ利用時に、式の後に # (番号) を記載してから Enter することで、適切に式番号が配置される。

本文内の「= < -」などの記号類は、印刷時に全角文字を使用するので、原稿でも全角とすること。上述の通り、式は文の要素であることを意識すると、本文内の変数名はやはり斜体を用い、関数名は斜体を用いない。

3.6 箇条書き

箇条書きは、原則として、等質事象または意味的な並列事象を列挙する際に用いる。等質または並列事象であるため、一般には順序なしリスト標記としても良いが、本文内で適切に参照して説明するためには順序つきリストとする方が望ましい。順序つきリストの場合は、表1の細別項目に記載の記号を使われない。

箇条書きでは、用言止めと体现止めを混在させないことを推奨する。各項目の末尾に句点は書かない。

3.7 フットノート

フットノートの利用は任意であるが多用しない方が望ましい。参考文献の参照・引用で対応することが適切ではない場合のウェブサイト等に用いる。本文に記載するには、論旨の文脈にかならずしも直接的に沿っていないものの、読者にとって有益な関連情報や補足情報を付すべきと判断された際などにも利用することができる。

フットノートを利用する際は、MS-Word の Footnote 挿入機能を用いること。通し番号は当該論文を通じて一貫した番号体系とし、エンドノートは利用しないこと。

4. 本文の後の記載事項

4.1 謝辞

記載は任意である。研究を遂行し、論文作成の過程での指導・教示・支援等を受けた対象に対する著者の謝意を表する際に記載してよい。同時に、謝意を受けた側がそ

の内容を適切に解釈できる記載となる必要がある。謝辞の対象が人である場合以外に、研究費・予算、例えば科学研究費補助金等の支弁を受けている場合もここに記載してよい。予算提供元の規程等で謝辞欄への記載が要件となっている場合は、ここに記載する。さらにその記載方法の指定もある場合には、その指定通り適切に記載する。

謝辞を記載する場合は、番号を付さない見出し文字『謝辞』を左端揃えで“MS Pゴシック” 8.5 [pt] にて記載し、次行にその内容を記す。

4.2 付記

記載は任意である。本文や謝辞としての記載が適切ではないものの、論文として記載しておくべき事項がある場合はここに記載する。例えば以下のようなものがある。

- (1) 投稿論文の根拠となる研究データ自体または所在等を示すメタデータの所在については、ここに記載する。
- (2) 共著者間における記載貢献箇所や貢献割合などを記載する場合は、ここに記載してよい。
- (3) 本論文が著者らによる修士・博士論文等を発展させて作成されたものである場合なども、ここに記載する。
- (4) 生成 AI の助けを借りて執筆等を行なった場合に、生成 AI の種別・モデル等を付した上で、執筆に援用した該当の節・段落等を記載する。
- (5) 著者らの所属機関内の倫理審査委員会の承認を得ている場合、その旨記載する。
- (6) 利益相反に該当する事案がある場合、論文刊行上問題とならないことを記載する。

付記を記載する場合は、番号を付さない見出し文字『付記』を左端揃えで“MS Pゴシック” 8.5 [pt] にて記載し、次行にその内容を記す。

4.3 参考文献とその引用

参考文献リストは、本文の後に記載する。謝辞や付記がある場合は、その後に記載する。見出しには番号を付さずに『参考文献』(文字間に全角スペース1字ずつ付すこと)を“MS Pゴシック” 8.5 [pt] にて中央配置して記載し、次行以降の各アイテムには本文内の参照出現順に番号を付して記載する。いわゆるバンクーバー方式の参考文献の参照の仕方にしたがう。

4.3.1 引用

本文内の参考文献引用は、記述内容に直接関連する文献を、参考文献リストに記載した上で、本文中の該当箇所の適切な位置に [番号] の形で示す。文末ではなく、

¹ 教育システム情報学会 <http://www.jsise.org/>

文中で参照する場合は、“文献 [番号]”のように“文献”に続けて半角スペースの後にブラケットを付すと良い。

(1) 本文内の記載例 1(参照)

情報教育において e ラーニングが有効であることが知られている [1].

(2) 本文内の記載例 2(文献□の形での引用)

文献 [1]では論文審査時の方針を、“多少荒削りでも、面白い論文、独創的な論文を積極的に取り上げる方針を鮮明にしています”のように述べている。

(3) 本文内の記載例 3(一部直接引用)

〇〇らは、“情報は「情」に続いて「報」とあることから内的状態を形式化して報せること”の重要性を主張した [1].

4.3.2 参考文献の掲載対象

本学会の取り扱う領域において、参考文献の参照や引用は学問体系を成す根幹ともいえる。その論拠・根拠とする参考文献に誤りがあると、論文の論述内容に対する学術的な信頼性を損ねる重大な問題となりえることから、その選定や解釈だけでなく、記述も含め特に慎重になされなければならない。また、著作権の性質に鑑みて、引用が認められるのは公知性が前提となるため、未公開の文献等は引用が適わないことにも注意が必要である。また、学術的文献等やウェブサイト等を論拠とするほかに、研究の真正性を示す上で研究データも重要であり、そのデータ公開あるいは所在を明らかにすることは、今や一般に要求されるところである。

本学会の参考文献として取り扱うことのできる、入手または閲覧可能な対象の種別と標準書式を以下に示す。これら以外の可否については、編集委員会の判断による。

- (1) 和文雑誌論文誌掲載記事(査読付きジャーナル)
- (2) 国内学会全国大会・シンポジウム講演論文集
- (3) 国内学会研究会原稿
- (4) 著書・書籍(ISDN 付きのものに限る)
- (5) プレプリントサーバ掲載記事(DOI 付与されているものに限る)
- (6) 修士論文・博士論文(オンライン入手可能なものに限る)
- (7) 英文雑誌論文誌掲載記事(査読付きジャーナル)
- (8) 国際会議予稿集掲載記事・国際会議論文
- (9) 英文以外の他国内学術雑誌論文(英文雑誌名・英文題目・英文著者名等があるものが望ましい)
- (10) 英文以外の他国内学術集会予稿集原稿(英文会議名・英文題目・英文著者名等があるものが望ましい)
- (11) 特許(公開されているもの)

(12) 法律・学習指導要領等、政府機関・自治体等が発行している公文書(Web アクセス可能なもの)

(13) データセット(オープンデータまたはデータの所在)

(14) Web ページ(URL の形で確認できるもの)

著作権法上の引用の慣行は、学術論文にとって、公表されている他者の著作物に依拠した論旨を表すことを意識して、一般的に必要な参照先を特定・識別可能とする情報を付す。原則としては、「著者」、「記事の題目」、「記事を公表した組織および記事が含まれる集合体の名称」、「巻・号・頁」、「発表年」、「デジタル識別子」が指定の書式・順で正確に記載されている必要がある。以下で、上記カテゴリに対する具体的な書式を示す。

4.3.3 参考文献の具体的書式

(1) 共通の・全般的事項

参考文献リストでは、[ブラケット]で番号を付し、その後半角スペースを挿入してから以降の書誌情報を記載する。書誌情報では常に半角ピリオド「.」と半角カンマ「,」を用い、これらの後には半角スペースを挿入する。巻号頁を表す「vol.」、「no.」、「pp.」の後にも半角スペースを挿入してから数字を記す。著者等が多数(4人以上)の場合、英文では“et al.”、和文では「ほか」を用いて省略してよい。なお、英文記載事項において、省略を示す半角ピリオドの後には半角スペースを要する。これらは、“MS P 明朝”8 [pt]を用いる。なお、英文書誌情報が両端揃え書式で間延びするスペースが生じる場合は、左端揃え書式で投稿してよい(最終の校正段階で編集側にて調整を試みる)。なお、書誌情報は J-Stage 掲載時に出力可能な文字に限られ、文字セットは Unicode でその符号化方式は UTF-8 で対応可能なものの範囲に限定される。

(2) 和文での学術刊行物の場合

和文の雑誌・予稿集・講演論文集等(4.3.2 節の 1~6)による書誌情報の記載は、最初に著者名として、姓名を省略なく、漢字の場合はスペースなく記載し、平仮名・カタカナのみの場合は間に半角スペースを挿入する。英文著者が欧文体のまま含まれる場合は、Givenname SURNAME の順に書き、それらの間には半角スペースを挿入する。記事の題目は、和文の場合は著者リストの後に全角コロンと半角スペース(“: ”)を挿入し、全角ダブルコーテーションでその題目を囲む。閉じる際のダブルコーテーションの前には半角カンマを入れる。その後、記事の発行主体・組織、雑誌・予稿集等の名称を記載し、半角カンマと半角スペースを挿入する。その後、vol., no., pp. (開始頁と終了ページの間はダッシュで繋ぐ)を記載する。その次に、発表年

を記載する。DOIもしくはURLを記載する場合は、発表年の後に半角カンマと半角スペースを挿入するが、それらが無い場合は、発表年の後は半角ピリオドを付す。

(3) 英文での学術刊行物の場合

項目の記載全てが英文での雑誌・予稿集・講演論文集等(4.3.2 節の 7～10)である場合、最初に著者名として Middle Name(記載のある場合)、Givenname をそれぞれ最初の文字を大文字で書き、半角ピリオドと半角スペースを置く。それに続いて、Surnameをフルスペルで書く。記事の題目は、英文の場合は著者リストの後に半角コロんと半角スペース(“: ”)を挿入し、半角ダブルコーテーションで囲む。閉じる際のダブルコーテーションの前には半角カンマを入れる。その後、記事の発行主体・組織および雑誌・予稿集等の名称を斜体で記載し、半角カンマを挿入する。その後、vol. , no. , pp. (開始頁と終了ページをダッシュで繋ぐ)を記載し、半角スペースを挿入する。その次に、発表年を記載する。DOIもしくはURLを記載する場合は、発表年の後に半角カンマと半角スペースを挿入するが、それらが無い場合は、発表年の後は半角ピリオドで閉じる。

(4) 内容が和英以外の学術刊行物の場合

なお、上記項目のうち、4.3.2 節の(9)(10)を参考文献としたい場合は、査読者がアクセス可能なものに限る。査読時に入手ができず書誌情報も記載できないものは不可である。英文記載のない文献の場合、対象の原著の著者に対する無許可の翻訳等による記載は認めない。

(5) 特許の場合

4.3.2 節の(11)は、発明者、出願番号(または文献番号)、発明の名称を、半角カンマと半角スペース区切りで示すこと。発明の名称は半角ダブルコーテーションで囲むこと。URL を記載する場合は半角カンマと半角スペースの後に記し、最後に半角ピリオドで閉じる。

(6) 学習指導要領、法律等の場合

4.3.2 節の(12)は、発行主体、文書名称、参考とした時点の版番号または公布年を記す。文書名称は半角ダブルコーテーションで囲むこと。URL がある場合は最終参照日と合わせて記載すること。

(7) 研究データの場合

著者ら自身で収集・整理された本論文の根拠データを付記に記載する他、4.3.2 節の(13)に記載の著者ら以外の研究データセットを参照される場合の書式は、Force11 によるサイトを参照されたい。 <https://force11.org/info/joint-declaration-of-data-citation-principles-final/> 日本語版は https://doi.org/10.11502/rduf_rdc_jddcp_ja にある。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/dsj/12/0/12_OSOM1

3-043/_pdfも参考にできる資料である。

研究データ自体に DOI が付されていない場合に、そのメタデータの所在を URL で記載する場合などを含め、著者らの機関等の管理外にあるベンチマーキングデータや Github コード等は、次項の Web サイトの記載を参考にされたい。

(8) 一般的な Web サイトの URL の場合

4.3.2 節の(14)の Web ページは、他の項目に含まれない任意の Web ページを題目・参照日とともに記載する。ただし、個人認証を経なければ参照できないサイトの URL は不可である。また、最終参照日を必ず記すこと。

(9) 例

和文雑誌の例を文献 [1]に、英文雑誌の例を [2]に、研究会予稿集内の原稿の例を文献[3]に例示しているので参考にされたい。プレプリントサーバの文献の例は [4] である。文献 [5]～[11]は学会からの公開資料である。[12], [13]は学習指導要領、法律の例である。また、特許の記載例は [14]にある。研究データの参考文献例は [15]に記載があるが、これは、IEEE Reference Guide [16] に記載されている Example である。

4.4 付録

付録は任意である。本文に記載するには、論旨の文脈上必ずしも必要としないものの、読者の理解を高めるのに有用な関連情報や補足情報を付すべきもののうち、フットノートでは十分なスペースが確保できない場合に記載する。例えば、アンケートの設問や実験時の説明文等が論述上の周辺事実として記載したい場合などが該当する。

付録を記載する場合は、番号を付さない見出し文字『付録』を左端揃えにて“MS Pゴシック” 8.5 [pt] にて記載し、次行以降にその内容を記す。

4.5 著者紹介

ショートレター・実践速報では、著者紹介は記載しない。

5. 標準ページ数

論文執筆に際しては、本テンプレートファイルを利用する。本ファイルは予めページサイズを B5 判としており、拡大・縮小なく印刷イメージとなる。横 24 字、縦 44 行×2 段組みの書式で、刷り上がりイメージにできるだけ近い状態で投稿のこと。

ショートレター、実践速報の刷り上がりページ数の上限の原則は、図表を含めて6ページまでとする。標準ページ数を超えると相対的にページ単価が上がるため、注意されたい。また、初稿4ページを超えるものはカバーページ内に

超過理由を明確に示すこと。

本テンプレートを用いた場合でも、刷り上がりにおける図表などの調整によりページ数にズレが生じる可能性もあるため、執筆時には考慮されたい。

なお、特集論文の場合は、最初のページに特集論文ということを書き入れるための行が挿入され、その後の余白含め 2 行程度必要となることにも注意されたい。

6. 研究倫理・COI, その他

6.1 カバーレターでの倫理事項の確認

本テンプレートに続くカバーレターには、研究倫理に関するチェック事項がまとめられている。そこに必要事項を記入し、論文と同じファイルに含めて投稿すること。なお、解説記事の場合は不要である。

6.2 不正行為の禁止

二重投稿を含む本学会の不正行為の禁止事項については文献 [4]および本学会のウェブ情報 [5]を参照すること。研究倫理の一般的な考え方については、著者だけでなく編集者、査読者の理解を深めるにも COPE²のドキュメントを参考にされたい。

6.3 著作権規程

本学会の「著作権規程」[6],「著作権規程説明資料」[7]を参照すること。

6.4 再投稿時のお願い

本学会の「再投稿に際してのお願い」[8]を参照して対応すること。

6.5 生成 AI 基本方針

研究過程・執筆過程において、生成 AI を利用している場合は、本学会の「生成 AI 利用時の基本方針」[9]を参照し、適切に対応すること。

6.3 利益相反

教育システム情報学会の倫理綱領第8項 [6]にしたがって、カバーレターに記載すること。

6.4 投稿方法・問い合わせ

以下の電子投稿システムから投稿する。

https://iap-jp.org/jsise/journal_3/

紙媒体による投稿は受け付けない。電子投稿に関する問い合わせ先は、以下の編集事務局である。

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 332-6
パブリッシングセンター (株)国際文献社内
教育システム情報学会 編集事務局
TEL: 03-6824-9363 FAX: 03-5206-5332
メールアドレス: jsise-edit@bunken.co.jp

謝辞

本ファイル作成に際し、下記付記記載の各学会テンプレートを参照した他、徳島大学大学院創成科学研究科および理工学部の知能情報コース等で毎年更新配布されている手引きも参考にした。ここで謝意を表す。

付記

本テンプレートファイル作成に際し、以下の学会の 2024 年夏～秋時点での論文投稿用テンプレートファイルを参照し、本学会の前テンプレートファイルとの比較をしながら検討を行い、作成した。

- 情報処理学会 Word テンプレート³
- 電子情報通信学会情報システムソサイエティ Word テンプレート⁴
- 日本教育工学会 Word テンプレート⁵

参 考 文 献

- [1] 瀬田和久, 仲林清, 桑原千幸, “執筆要領の改定主旨,” 教育システム情報学会誌, vol. 39, no. 4, pp. 404-414, 2022, <https://doi.org/10.14926/jsise.39.404>.
- [2] R. Okada, “Teachers’ autonomy support in synchronous online learning environments,” *Information and Technology in Education and Learning*, vol. 1, pp. 1-8, 2021, <https://doi.org/10.12937/itel.1.1.Reg.p004E>.
- [3] 佐田峻祐, 柏原昭博, “講義ロボットロールによるバイアスが学習者の学びに与える影響,” 教育システム情報学会研究会, vol. 39, no. 4, pp. 12-19, 2024.
- [4] A. Vaswani, N. Shazeer, N. Parmar, et al., “Attention Is All You Need,” ver. 7, *Advances in Neural Information Processing Systems*, <https://doi.org/10.48550/arXiv.1706.03762> (参照: 2024.12.11) <https://arxiv.org/abs/1706.03762>
- [5] 教育システム情報学会, “不正行為禁止規程,” (参照: 2024.12.11) https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2023/05/fuseikinshi_kitei.pdf
- [6] 教育システム情報学会, “二重投稿に関するよくあるご質

² <https://publicationethics.org/>

³ <https://www.ipsj.or.jp/journal/submit/style.html>

⁴ https://www.icice.org/jpn/shiori/iss_3.html

⁵ <https://www.jsiet.gr.jp/journal/instructions-for-authors/>

問と回答,” (参照:2024.12.11)
<https://www.jsise.org/paper/subguide/faq/>

[7] 教育システム情報学会, “著作権規程,” (参照: 2024.12.11) https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2022/08/copyright_kitei.pdf

[8] 教育システム情報学会, “著作権規程説明資料,” (参照:2024.12.11) https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2022/08/copyright_explanation.pdf

[9] 教育システム情報学会, “論文再投稿に際してのお願い,” (参照:2024.12.11)
<https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2022/08/repost.pdf>

[10] 教育システム情報学会, “生成 AI 利用時の基本方針,” (参照:2024.12.11) https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2023/08/Generative-AI_20230807.pdf

[11] 教育システム情報学会, “倫理綱領,” (参照: 2024.12.11) <https://www.jsise.org/about/rinri/>

[12] 文部科学省, “高等学校学習指導要領(平成 30 年告示),” (参照:2024.12.11)
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf

[13] 著作権法, (参照: 2024.12.11) <https://laws.e-gov.go.jp/law/345AC0000000048>

[14] 山崎健一, 柏原昭博, 松浦健二ほか, 特許 7692192(特願 2021-068394, 特開 2022-163458), “模擬運転装置、及び模擬運転装置の制御方法”

[15] U.S. Department of Health and Human Services, Aug. 2013, “Treatment Episode Dataset: Discharges (TEDS-D): Concatenated, 2006 to 2009,” U.S. Department of Health and Human Services, Substance Abuse and Mental Health Services Administration, Office of Applied Studies, doi:

<http://dx.doi.org/10.3886/ICPSR30122.v2>

[16] IEEE, “IEEE Reference Guide (V 11.29.2023),” (参照: 2024.12.11)
https://journals.ieeeauthorcenter.ieee.org/wp-content/uploads/sites/7/IEEE_Reference_Guide.pdf

付 録

表 2 本書でのフォントおよびサイズ

記載箇所	フォント等
論文種別	MS PGothic 9 [pt]
和文題目	MS PGothic 12 [pt]
和文氏名	MS PMincho 10.5 [pt]
英文題目	Times New Roman 12 [pt]
英文氏名	Times New Roman 10.5 [pt]
著者所属	MS PMincho 8 [pt]
フットノート	MS PMincho 8 [pt] Times New Roman 8 [pt]
章見出し	MS PGothic 10 [pt]
節見出し	MS PGothic 8.5 [pt]
項見出し	MS PGothic 8.5 [pt]
細別項目	MS PMincho 8.5 [pt]
本文標準文字	MS PMincho 8.5 [pt]
図表キャプション	MS PGothic 8.5 [pt]
謝辞・付記・付録・参考文献見出し	MS PGothic 8.5 [pt]
謝辞・付記・付録	MS PMincho 8.5 [pt]
参考文献リスト項目	MS PMincho 8 [pt]

教育システム情報学会 学会誌カバーレター

2025/6 改訂

教育システム情報学会 学会誌に論文を投稿する際には、本カバーレターを添付してください。※は必須項目です。なお、一度「返戻」と判定された論文を修正して再投稿される際は、再投稿時のお願い(<https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2022/08/repost.pdf>)をご確認いただいたうえで項目(10)にご記入ください。

- (1) 論文タイトル※:
- (2) 著者名・所属※:
- (3) 論文カテゴリ※: 一般論文・実践論文・ショートノート・実践速報(いずれかを残す)

フルペーパー(一般論文または実践論文)を投稿される方へ

フルペーパーとしては返戻と判定する場合も、ショートノートまたは実践速報に種別変更することで条件付き採録と判定することがあります。(a)フルペーパーでの判定のみを希望されるか、(b)ショートペーパーでの判定も希望されるか、以下のいずれかに必ずチェックをいれてください。

☐ (a)フルペーパーでの判定のみを希望する:フルペーパーで返戻の場合には、ショートノートまたは実践速報での掲載(条件付き採録)を希望しない。

☐ (b)フルペーパーでの判定以外も希望する:フルペーパーで返戻の場合には、ショートノートまたは実践速報での掲載(条件付き採録)を希望する。

※ (a)の場合は、フルペーパーでの採否のみ審議されるので、査読結果をお返りするまでの期間短縮が見込まれます。(b)に希望された場合でも、初稿時点で標準ページ数を大幅に超えた投稿などはショートペーパーへの修正自体が大幅な改修となりえるため、そのような状況下ではカテゴリ変更での条件付き採録判定が行われないこともあります。

- (4) 論文の要約と論文の意義: 特に、投稿論文で設定されたリサーチクエスションおよび学会誌原稿執筆要領の「2.学会誌原稿の種別」における「3.研究論文の評価観点」に記載の新規性、有用性、信頼性の観点に照らした論文の主張点。この項目の記入は任意ですが、**査読判定時に参考にしますので、記入されることを強く推奨します。**

- (5) 投稿論文に関連する受賞がありましたらお書きください(任意)

- (6) 論文書式の確認※: (a)～(e)のいずれかが「いいえ」の場合、投稿できません(ただし(b)は理由書によって認められる場合がある)

(a) 1 ページ横 24 字、縦 44 行×2 段組みの書式である

はい・いいえ

(b) 一般論文・実践論文の場合、12 ページ以内である

はい・いいえ・理由書添付

- | | |
|---------------------------------|-------------|
| (c) ショートノート・実践速報の場合, 6 ページ以内である | はい・いいえ |
| (d) 図表内の文字サイズは7ポイント以上である | はい・いいえ |
| (e) その他, 学会誌原稿執筆要領の書式指定を順守している | はい・いいえ |
| (f) カラー印刷の希望 | あり・なし・該当しない |

著者最終稿に対して, 刷り上がり時には図表などの調整によりページ数が変わる場合がありますが, 費用は刷り上がりページ数となります。また, ショートペーパーでは7ページ以上は掲載されません。

(7) 倫理的事項の確認※: (a～c のいずれかが「いいえ」の場合受理されません)

- | | |
|--|------------|
| (a) 実験等における被験者・学習者の人権的配慮がなされている
注) 所属組織の倫理規程に従っている場合は, その旨を論文に記載していただければ結構です。 | はい・いいえ・非該当 |
| (b) 論文刊行における研究倫理・社会通念上の問題はない | はい・いいえ |
| (c) 著者全員が投稿前に投稿論文の全ての内容を確認した | はい・いいえ |

(8) 二重投稿に関する事項の確認※:

- | | |
|--|---------------|
| (a) 学会誌原稿執筆要領 4 の 2) 3) 記載の二重投稿の定義を確認した
注) 上記が「いいえ」の場合受理されません | はい・いいえ |
| ① 投稿原稿に関連する既発表論文を原稿内で適切に引用している
注) 上記が「いいえ」の場合受理されません | はい・いいえ |
| ② 投稿原稿に関連する投稿中・印刷中の論文がある
「はい」の場合, 投稿中・印刷中の論文の書誌情報を以下に記入するとともに, 当該論文を電子投稿システムの「添付資料」として提出してください。なお, 投稿中の論文について投稿先のジャーナル名を記す必要は必ずしもありません。 | はい・いいえ |
| (b) (a) の定義に該当しないことを著者全員が確認した
注) 上記が「いいえ」の場合受理されません
※二重投稿に該当しないことの判断に迷う場合は, 査読プロセスに入る前にご相談ください。
以下に懸念される内容をご記入頂き, 論文投稿時に関連論文を事務局にメールでお送りください。 | はい・いいえ・判断できない |

(9) 利益相反に関する事項の開示※

- | | |
|-----------------------|--------|
| (a) 利益相反に関する事項はない | はい・いいえ |
| (b) 上記が「いいえ」の場合, その内容 | |

注) 利益相反に該当する事例としては, 研究の対象が補助金や謝礼を受け取っている企業の製品の機能である場合など, 論文に関連する利害関係が挙げられます。このような場合は, 利益相反に該当しますので, 補助金や謝礼を受け取っている旨を以下に記載してください, ただし, これによって論文が投稿できなくなるわけではありません。

(10) 再投稿に際してのコメント (<https://www.jsise.org/wp-content/uploads/2022/08/repost.pdf> をご覧ください)